A 年復活節第 5 主日　ヨハネ14章1―14節

［直訳］

1「乱されるな　あなたがたの　心は。
　信じなさい　神を　そして　私を　信じなさい。
2私の父の家の中に　住まいが　多くの　ある。
　もしそうでないなら、　私は言っただろうか　あなたがたに
　というのは　私は行く　準備するために　場所を　あなたがたに。
3そして　もし　私が行くなら　そして　私が準備するなら　場所を　あなたがたに、
　再び　私は来る　そして　私は受け入れるだろう　あなたがたを　私自身のもとに、
　ようにと　ところに　いる　私が　また　あなたがたが　いる。
4そして　ところへの　［私が］　去る　あなたがたは知っている　道を」。
5言う　彼に　トマスは、　「主よ、私たちは知らない　どこに　あなたが去るのか。
　どのように　私たちはできるのか　道を　知ることが」
6言う　彼に　イエスは、　「私は　ある　道で　そして　真理　そして　命。
　誰も　行かない　父のもとに　以外は　私を通って。
7もし　あなたがたが知っているなら　私を、
　また　父を　私の　あなたがたは知るだろう。
　そして　すでに今　あなたがたは知る　彼を
　そして　あなたがたは見ている　彼を」。
8言う　彼に　フィリポは、
　「主よ、　示してください　私たちに　父を、　そして　満足する　私たちは」。
9言う　彼に　イエスは、　「これほどの　時間　あなたがたと共に　私はいる
　そして　あなたがたは知らないのか　私を、　フィリポよ。
　見ている者は　私を　見ている　父を。
　どうして　あなたは　言う　『示してください　私たちに　父を』。
10あなたは信じないのか　次のことを
　私が　父のうちに　そして　父が　私のうちに　いる。
　言葉を　ところの　私が　言う　あなたがたに　私自身から　私は語らない、
　だが父が　私のうちに　留まりつつ　行う　業を　彼の。
11信じなさい　私を　次のことを　私は　父のうちに　そして　父は　私のうちに。
　もしそうでないなら、　業それ自身によって　信じなさい。
12まことに　まことに　私は言う　あなたがたに、
　信じる者は　私を
　業を　ところの　私が　行う　その者も　行うだろう
　そして　より偉大なことを　それらより　行うだろう、
　というのは　私は　父のもとに　行く。

13 そして　ものは何でも　あなたがたが求める　私の名のうちに
　これを　私は行うだろう、
　ようにと　栄光を帰される　父が　子のうちに。
14 もし　何かを　あなたがたが求めるなら　私に　私の名のうちに
　私は　行うだろう。」

［新共同訳］

1 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。2 わたしの父の家
には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったで
あろうか。3 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたし
のもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。4 わたしがど
こへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」5 トマスが言った。「主よ、どこへ行かれ
るのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」6 イ
エスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも
父のもとに行くことができない。7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知
ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」8 フィリポが「主
よ、わたしたちに御父をお示しください。そうすれば満足できます」と言うと、9 イエスは言
われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを
見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示しください』と言うのか。10 わたし
が父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う
言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられる
のである。11 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じな
さい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。12 はっきり言っておく。わ
たしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが
父のもとへ行くからである。13 わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こ
うして、父は子によって栄光をお受けになる。14 わたしの名によってわたしに何かを願うなら
ば、わたしがかなえてあげよう。」

①文脈

ⓐ13 章 30 節には、イスカリオテのユダがイエスから「パン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった」と述べられている。その直後にイエスは弟子たちに新しい掟を与え、「互いに愛し合いなさい」と命じる。13 章 31 節から、世を去るイエスが弟子に残した「告別説教」が始まると見られている。13 章 36―38 節にはペトロの離反の予告が挿入されており、14 章 1 節から「告別説教」が本格的に展開されてゆく。弟子たちは、イエスが自分たちから去っていくと聞かされ（一三 33）、心を乱している。その弟子たちにイエスは「心が乱されるな、信じなさい」と語りかける。

ⓑ「告別説教」は 16 章まで続き、その直後の 17 章は、イエスが後に残す弟子のためにささげた祈りとなっている。イエスが祈り終えると、ユダに引き連れられた兵士たちは、「松明やともし火を手にして」、イエスを捕らえにやって来る（一八 3）。パン切れを受け取って、「夜」イエスの

もとから離れ去ったユダは、松明を手にした世の闇と共に、イエスを捕らえるために近づく。「松明やともし火を手にして」という表現は共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）には見られない。イエスの「告別説教」は、13章30節の「夜であった」と18章3節の「松明やともし火を手にして」に挟まれる形に配置されている。このように配置することによって、「告別説教」が語られる家の外は闇の支配にあることを暗示する。

②構成

ⓐ第一段落（1―6 a節）

㋐1節二行目に「信じなさい……信じなさい」と命令形が繰り返されている。同じように、11節でも「信じなさい、信じなさい」と繰り返される。2節二行目と11節二行目には「もしそうでないなら」が置かれ、2節三行目と12節五行目の末尾には「私は行く」が現れる。このように、「信じなさい」「もしそうでないなら」「私は行く」という三つの語によって1―2節と11―12節は対応しており、全体を囲い込んでいる。

㋑2節最後の「場所をあなたがたに準備する」が3節一行目で繰り返され、1―2節と3節以下をつないでいる。11節一行目の「私は父のうちに、そして父は私のうちに」は10節二行目にもあり、10節以前と11節以下をつないでいる。

㋒4・5・6節に「道」という語があるが、6節二行目以下には見られなくなる。それに対して、6節二行目から10節には「父」という語が現れる。「父」は2節に一回用いられているが、5節以前ではこの一回のほかは用いられていない。このような配置を見ると、3節から6節一行目は「道」を主題としており、6節二行目から10節は「父」を主題としていることが分かる。語句の配置から見ると、6節を境に前半と後半に分かれるが、6節は「道」と「父」という二つの主題をつなぎ合わせる役目も果たしており、全体を理解するために重要な節となっている。

ⓑ第二段落（6 b―14節）

㋐3―6節一行目の中心にトマスの問いが置かれている。それと同様に、6節二行目から10節の中心にはフィリポの願いが置かれている。フィリポは「父を示してください」と願う（8節）。この願いを挟むように、7節四行目に「彼（父）をあなたがたは見ている」、9節三行目に「私を見ている者は父を見ている」と述べられている。このように配置することによって、イエスは父なる神を啓示する者であることが主張される。

㋑9節ではイエスは神を啓示する者であることが「私を見ている者は父を見ている」と表現されたが、10節では神とイエスが一体であることが「私が父のうちに、父が私のうちに」と表現される。この表現は11節にも繰り返され、10節以前と11節以下を結び付ける。

㋒12節の二つの「行うだろう」は未来形である。3節の「私は受け入れるだろう」と7節の「あなたがたは知るだろう」も未来形。7節の「知るだろう」は、そのすぐ後で「すでに今あなたがたは知る」と言い換えられている。父をすでに弟子は知っているが、弟子は「知らない」と思い込んでいる。従って、6―10節のイエスの言葉は弟子の現在の在り方への呼びかけとなっている。イエスの言葉を信じるなら、3節と12節に示されるように、父のみもとに受け入れられ、イエスの業を行う者となる。

㋓13―14節にも二つの未来形（行うだろう）が用いられている。弟子たちが「イエスの名のうちに求めるなら」、イエスはその求められたことを行う。「イエスの名のうちに」はイエスの言

葉を信じて、イエスの業を行う者の在り方を表している。13節一行目と二行目は、「イエスの名のうちに」「求める」「行うだろう」によって、14節と対応している。その間に「父が子のうちに栄光を帰されるようにと」が置かれ、イエスが生涯をかけて行う目的が表されている。

③乱されるな（1―6 a節）

ⓐ2節の「住まい（モネー）」は「留まる（メノー）」という動詞から派生した語である。新約聖書ではヨハネ福音書に二回（ここと一四23）用いられるだけである。「留まる」という動詞は「告別説教」の中で、特に15章の「まことのぶどうの木」では重要な主題となっている。「留まる」はヨハネ14章に三回、15章に十一回現れる（一四10・17・25、一五4［三回］・5・6・7［二回］・9・10［二回］・16）。

ⓑ「行く（ポレウオマイ）」という動詞はヨハネでは死を表す。イエスの死は終わりではない。それゆえ、イエスは「父のもとへ行く」と表現する。イエスが父のもとへ行くのは、弟子たちのために場所を用意するためである。

ⓒ2節三行目で「というのは」と訳した語（ホティ）は「次のことを」とも訳すことができる。理由を表す意味に取るか、「言う」という動詞の目的節と取って、「言う」内容を表すとするかによって、2節後半は訳し方が分かれるが、全体の意味としてはさほど大きな違いとはならない。

㋐「もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから」

㋑「もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか」

ⓓ3節では「再び私は来る」と述べて、イエスの再来が語られている。共観福音書も終末時に到来するキリストを述べているが、ここではそれとは異なる意味で述べられている。イエスの再来は、聖霊という形をとって、イエスが弟子のうちに現臨することを意味している。イエスは14章15節以下で、聖霊の授与を約束している。

ⓔ4節の「私が去るところへの道をあなたがたは知っている」で、「ところへの」と訳した語は二つの解釈ができる。一つは「私が去るところの道を」であり、もう一つは「私が去るところの場所への道」である。

ⓕ3―6節一行目の中心に、「どのように道を知ることができるのか」というトマスの問いが置かれている（5節）。この問いに対してイエスは「私は道である」と答える。イエスは単なる導き手ではなく、道そのものであり、「真理と命」という「道」である。

ⓖしかし、別の解釈も可能である。6 b―10節には「父」が八回現れ、父との関係からイエスが誰であるかが述べられている。第二段落の最初である6節二行目を見ると、「誰も、私を通って以外は、父のもとに行かない」とある。この言葉に照らしてみると、6節一行目は、「イエスは、真理であり命である父への道である」という意味にも取ることができる。従って、「真理、命」という語はイエスを指す語にもなるし、神を指す語にもなる。

④信じる者は行うだろう（6 b―14節）

ⓐ6節後半からは、父との関係からイエスが誰であるかが明らかにされる。イエスは父へと至る唯一の道であるから、「誰も私を通って以外は（通らなければ）父のもとには行けない」と述べる。イエスは「真理と命という道」であると同時に、「真理と命である神への道」である。それゆえ、

イエスは「父を示してください」と願うフィリポに、「私を見ている者は父を見ている」と言う。イエスは神を啓示する者である。

ⓑイエスは弟子たちに「業それ自身によって信じなさい」と命じる（11節）。10章37節以下ではイエスを信じることのできないユダヤ人に同じ意味の言葉が向けられている。イエスは自分から語るのではなく、父なる神がイエスに留まってその業を行っている（10節）。

ⓒ10―11節では、父とイエスとの関係が「私は父のうちにそして父は私のうちに」と表現されている。「うちに」と訳した前置詞は2節（私の父の家の中に）で「中に」と訳した語と同じである。父とイエスの深い交わりを表すこの語は、13―14節ではイエスと弟子たちの関係を表すために用いられる。弟子は何かを求めるとき、「イエスの名のうちに」求める。「イエスの名のうちに」は「イエスと一つとなって」「イエスの心で」を意味する。

⑤イエスと共に神のもとにあるため

ⓐイエスカリオテのユダがイエスのもとを去ったのは「夜」であった（一三30）。イエスと弟子が最後の晩餐を共にした家の外は闇が覆っているが、イエスの座る食卓は光に満ちている。「光として世に来た」イエス（一二46）が弟子に別れを告げる。「わたしが行く所にあなたたちは来ることはできない」（一三33・36）というイエスの言葉によって、弟子の心は乱されている。弟子は、光であるイエスが立ち向かった闇との戦いを受け継がなければならない。闇の攻撃は凄まじく、イエスも死を覚悟したとき、「今、わたしは心騒ぐ」（一二27）と神に訴えたほどである。引き継がねばならない戦いを前に弟子は動揺している。その弟子にイエスは「あなたがたの心は乱されるな、信じなさい」と呼びかける。

ⓑ弟子が信じなければならない第一のことは、イエスが「あなたがたに場所を準備するために（父のもとへ）行く」ということである（2―3節）。イエスの死は闇であるこの世への敗北ではなく、「あなたがた」のための死であり、それは神やイエスと共にいることができるようにするためである。

ⓒ第二に信じるべきことは、イエスは「道である」ということである（6節）。イエスは人が道徳的に歩むための「道」というよりも前に、人が「真理と命」を受けるための「道」であり、救いへの「道」である。イエスと共に歩むとき、人は「真理」と「命」を受けることができる。そして、イエスという「道」を歩む者は「真理であり命である神」のもとに至る。

ⓓ第三に信じるべきことは、「私は父のうちに、父は私のうちにいる」ということである（10・11節）。イエスはサマリアの女に「生きる水」を与え（4章）、ラザロに「命」を与え（11章）、生まれながら目の見えない人に「光」を与えた（9章）。これらはすべてイエスのうちに働く神の業である。イエスが父のもとへ行き、共に住む場所を弟子に準備することを信じ、イエスは真理と命を与える「道」であると信じ、イエスと神が一体であると信じる者は、イエスの業を行う者となる。しかもイエスは、自分の行う業よりも「より偉大なこと行うだろう」と弟子を勇気づけて、闇との戦いに必ず勝つことを約束している。救いの道であるイエスを信じる者は闇と戦う。道の終わりには父が立ち、イエスが迎え入れてくれる時が待っているからである。

ⓔこの世に残され、闇との戦いを引き継ぐ弟子たちの願いをイエスは叶える。弟子はイエスと一つとなり、力を合わせて、イエスの願うことを求めるからである。「イエスの名のうちに」願うとは自分勝手な願いを語ることではなく、父と一体であるイエスのうちに生きることを意味する。弟子たちがイエスの名を呼び、イエスの願いを求めるとき、神の栄光が輝く。